【 129 】

氏名	髙 知 利 勝
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	博 乙 第 2124 号
学位授与の日付	平成2年 6月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者（学位規則第5条第2項該当）
学位論文題目	ULTRASONIC ASSESSMENT OF EFFICACY OF RADIOTHERAPY IN CASES OF CARCINOMA OF THE CERVIX UTERI BY USING RECTOSONOGRAPHY （子宮頸癌に対する放射療法の効果判定に対する経直腸的超音波断層法の利用）
論文審査委員	教授 平木祥夫　教授 折田薫三　教授 赤木忠厚

学位論文内容の要旨

子宮頸癌の進行例の多い放射療法例は，再発を来す例が少なくない。しかし，その治療効果判定は，今までは直腸診という主観的方法に頼るところが多かった。そこで，それを客観的に捉える目的で，経直腸的超音波断層法の一方法である経直腸的ラジアルスキャン超音波断層法（TRRS）を施行した。対象は1984年10月より1986年10月までの間，岡大病院で放射療法を施行した29例である。そのうち6例に2年以内に局所再発を認めた（Ⅲb期3例，Ⅳa期3例）（non-effective例）．各症例の放射療法前，放射療法中，放射療法終了時，放射療法後2カ月，6カ月の計5回TRRSを施行した。そして，effective例（局所再発を認めなかった症例）およびnon-effective例に分け，各々の時期の子宮傍組織エコーの長さ，幅，形状，エコー強度，輪郭，子宮頸部の大きさの6項目につき検査した。non-effective例では，以下の所見が有意に多かった。即ち子宮傍組織エコー幅が放射療法終了時，ないしはその後に，増大傾向を示し1.0cmを越えるもの（再発率：83%），子宮傍組織エコー形状が放射療法後band typeまたはmassive typeを示すもの（再発率：71%），子宮傍組織エコー強度が放射療法前の高エコーが放射後も引き続くか，一旦エコー強度が低下した後高エコーへと増強するもの，（再発率：57%），輪郭が放射療法後粗雑なもの（再発率：50%），子宮頸の大きさが放射療法後増大傾向を示すもの（再発率：43%）であった。したがって，TRRSは，上記5つの項目に注意しつつfollow upを行うことで，子宮頸癌放射療法例に対する治療効果ならびに，予後不良例の早期チェックに有用な診断法であると考えられた。

なお，本論文は共著論文であり，共著者の協力を得て完成したものである。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は放射線療法を施行した子宮頸癌29例について子宮頸部および子宮傍組織を経直腸的超音波断層法を用いて臨床的に研究したものである。従来十分確立されていなかった本法の放射線療法の効果判定への応用について重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって，本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。